

## 「いじめ」はあるのが正常では？

安 江 薫

中世欧州の魔女狩りのように、メディアが校長先生や教育委員長に土下座させる儀式が済んで、一連のいじめ自殺騒動もだいぶ下火になったようです。その渦中で、文部科学大臣宛に自殺予告の脅迫状が届いて文科省が右往左往したり、教育基本法を改正すればいじめはなくなるのかと国会議員が程度の低い質問をしたりと、話題が豊富に提供されました。

### ○自殺予告への異様な対処

袋叩きに遭いそうですが、実は私は、予告に対して「自殺したかったらどうぞ。あなたが居なくなっても世間は何の痛みも感じませんよ」と非情に答えられれば、自殺志願者は減ると思っています。しかし、人の命は地球より重いという甘くて欺瞞的な社会風潮のなかでは、文科相はそうは言えません。やむなく「尊い命を粗末にしないように」と呼び掛け、「豊」という文字が付く地域の学校の監視のために多くの人を動員せざるをえないはめに陥りました。この異様な事態に眉をひそめた人たちは少なくなかったことでしょう。

### ○命が大切なのは尊いからではない

同じ頃、高校の履修漏れが発覚して大問題に発展しました。混乱した状況のなかで校長先生が自殺しましたが、そのときメディアは「尊い命を大切に」と言ったのでしょうか。いえ、責任逃れだと非難ただけで、同情さえもしませんでした。命が大切なのは尊いからでも貴いからでもありません。「吹けば飛ぶような」軽いものだからこそ、飛ばないようにしっかり押さえておかなければならないのです。「あなたの命は『とうとい』ですか」と問われて、あなたは「はい」と答えられますか。

### ○気の毒だった校長先生と教育委員長

一つの学校には数百人の、一学級には約四十人の児童生徒がいます。一家庭の子供は数人です。いちばん丁寧に子供と接し見守れるのは誰でしょうか。相手にするの数が多くなるほど、一人ひとりの子供に対する実質的責任は薄まるのではありませんか。教育委員長が一人ひとりの子供の顔を知るはずがありません。組織上の責任者とはいえ、メディアにいじめられる校長先生や教育委員長には同情します。とはいえ、7年間もいじめ自殺はなしと報告してきた隠蔽体質はとがめられるべきでしょう。

## ○いじめを根絶しようとする動き

熱しやすくさめやすいのがメディアの常で、狂騒は長続きしません。その短い間に、長たらしい「いじめによる自殺」は「いじめ」に短縮されて、松山市にも見られるように、社会には「いじめ」を根絶しようとする風潮が生まれてきました。しかし、「いじめによる自殺」ならともかく、「いじめ」そのものまで根絶してよいものでしょうか。また、根絶できるものでしょうか。

## ○いじめはなくすべきか

「いじめは本能だ」と言う教育再生会議の委員がいます。「いじめは大人の世界でもある」と言う識者もいます。まあ、識者でなくてもそう言いますが。推測すると、この人たちは「いじめはなくすべきであるが、なくならない」と言っているようです。しかし、テレビのある討論番組で視聴者からつけつけられた「いじめはなぜ起きるのか」という根本的疑問に答えられなければ、「いじめはなくすべきである」とは言えません。

## ○教育とは何か

永世棋聖で東京都教育委員の米長邦雄氏がある雑誌に書いています。「教育とは何か。教育者とはどのような人かが問われているのだが誰も答えられない」。気持ちは分かりますが、誰も答えられないとは言い過ぎでしょう。

ベテラン小児科医の田下昌明先生が言われるように、「食べ物を与えるだけではヒトは人間になりません」。動物としてのヒトつまり子供を人間に成長させるには、躰(しつけ)と教育によって鍛えることが必要なのです。子供は鍛えられる過程で自分の能力の限界と個性と適性を悟ります。それと並行して、何が待ち受けているか予測できない人生に向かって自らの能力を頼りに踏み出す覚悟を養い、それぞれの立場で社会を担えるようになるのです。

ギリシャのアポロン神殿には「汝自らを知れ」と刻まれているとのこと。これは古代ギリシャの哲学者ターレスの格言で、後にソクラテスが取り上げた言葉です。子供が「己を知る」手助けをするのが教育ではないでしょうか。

なお、「己を知る」ことと「自分らしさ」の主張とは似て非なるものです。「己を知る」ことは自己の確立ですが、前号で述べたように、「自分らしさ」は単なる「わがまま」に過ぎません。

## ○鍛えることをおろそかにした現在の教育

今の教育の致命的欠陥は、「鍛える」ことをなおざりにしていることです。それは「ゆとり教育」という言葉が象徴しています。人は平等であるとか、先生は子供と友達であれとか、子供の人権と自主性を尊重せよとか、強制を止めて説得せよとか、褒めて育てよ、な

どというきれいごとばかりが聞こえてきますが、そんなことだけでは、子供を鍛えることなど不可能です。考えてみてください。育児や躾は強制と禁止のカタマリではないですか。「躾」という字は「身」と「美」から成るとよく言われますが、強制と禁止が人を美しくするという面をもっと意識しなければなりません。

### ○金縛りの先生たち

先生方は今、徒手空拳どころか、手足を縛られ、口も封じられている状態です。体罰はだいぶ前から禁止されていて、叩いたりつねったりはできません。廊下に立たせたり、校庭を何周か走らせたり、皆の前で正座させたりといった私たちには懐かしい間接的体罰も許されません。ケンカを止めようとして子供に手をかければ体罰とみなされるそうです。女の子にちょっとでも触れようものならセクシュアル・ハラスメントですし、大きい声で叱るとパワー・ハラスメントになり、「教育委員会へ告げ口するぞ」と生徒に脅されます。こんな状態で「鍛える」ことができますでしょうか。半人前にも至らない子供に一人前以上に人権を認めたりするから、こんなことになるのです。

### ○顧客主義が教育をダメにする

それから、鍛えられる子供に、「どんな鍛え方をして欲しいですか」とおうかがいを立てる顧客主義（お客様は神様という考え方）が教育をだめにしています。

### ○先生は生徒の手本であるべし

教育再生のためには、まず先生方の縛りを解くことが必要だと思います。一方で、先生方に対しても注文があります。先生方には生徒の手本となる覚悟を持っていただきたいのです。つまり、先生方は自らを労働者と思わないでください。

思い出された方もいることでしょう。先生が聖職であることを日教組が拒否したことが今の事態を招いた一つの遠因です。先生が手本でないから、生徒の自主性や「自分らしさ」を尊重しなければならなくなり、生徒と友だちになって誤った平等意識をはびこらせたりするのです。対等な人やお客様に強制や禁止をすることなどできません。

### ○先生への敬意が教育の前提

師は弟子より格が上です。そのうえ、弟子が尊敬するから師なのです。流れは上から下に向かうのが常で、知の流れも例外ではありません。教育が知の流れである以上、格上の先生に対する格下の生徒の敬意が絶対の前提になります。たとえそれが本心でなくても、形だけでもよいのです。その建前が保たれていれば、学級崩壊は起きないでしょう。

親が子供の前で先生を侮る言葉を吐いてはいけないのはもちろんです。

先生は生徒を指導するうちに当然教訓を得ます。その経験を「生徒に学んだ」と得意気

に語る先生がいますが、そういう先生は愚かです。なぜなら、先生はその教訓を自ら学んだはずだと思うからです。

## ○子供はガキである

私が子供の頃、大人に逆らっても、「反抗期みたいだから仕方ないか」と本気で相手にしてもらえませんでした。反抗期には第一と第二の2つがあります。皆さん、おぼえておられませんか。最近では反抗期という言葉自体を聞きませんから、若い方はご存じないかもしれません。そもそも、当時の大人は子供をガキ（餓鬼）と呼んで、悪さをするのは当たり前だと思っていました。近頃は「子供は純真だ」という変な人たちが多くなっていますが、昔の日本人が聞いたら笑い転げることでしょう。進歩的な人たちはきれいな言葉に酔って、本当のことが見えないのです。

### 【第一反抗期】

「泣く子と地頭には勝てぬ」と言うように、幼児の無理は通ります。そのため、幼児は「世界は自分を中心に回っている」と錯覚しています。それでも、小学校へ入る頃には、どうやら現実はそうではなさそうだという懐疑心が生まれて、イライラし始めます。また、次第に友だちとの能力の違いに気付いてきます。なぜ、速く走れないのか。なぜ、算数が解らないのか。なぜ、作文ができないのか。なぜ、絵がうまくないのか。なぜ、きれいな声が出せないのか。なぜ、のろまなのか。なぜ、もてないのか。なぜ、口下手なのか。なぜ、気が弱いのか。数え上げたらきりがありません。この時期が第一反抗期だと思います。

ただし、辞書によれば、第一反抗期は正常な発達過程では三、四歳頃で、身体的自立に伴う自己主張の表れだそうです。

### 【第二反抗期】

第二反抗期は中学に入る頃から始まります。何とか劣等感を克服しようとして、変身願望に捉われます。例えば、弱気の返上のためにワル振ってみると言うように。心の中には嫉みや僻み、羨み、憎しみ、恨み、悩みなどが渦巻いています。天は二物を与えずどころか、三物も四物も貰っているやつらがいるのではないか。神様はなんと不公平なのだ。人は平等なんて嘘っぱちだ。そういう心のムシクシヤを抑えられずに発散するとき、反抗やいじめやケンカや非行が起きるのです。学校は問題が起きる所で、それがむしろ正常な姿です。

どうにもならない不平等と格闘している子供に向かって「人は平等だ」と言っても、励ましにはなりません。そう言う先生や親は、子供には裸の王様か嘘つきにしか見えません。

## ○劣等感の克服＝己を知る

不平や不満を言っているだけでは何も解決しません。いじめたりいじめられたりしてあがいているうちに、望んでも叶わず努力しても至れないことがあるという現実が次第に受け入れられるようになります。そして、与えられた資質を磨いて生きるほかないのだと悟るに至って、劣等感を克服する、つまり己を知るのです。自分を知ることは他人を知ることでもあります。

繰り返しますが、足りないところは努力で補わなければなりません、努力してもどうにもならないことがあります。先生も親も無神経に、「努力が足りないからできないのだ」とか「努力すればできないことはない」と言っただけはなりません。

## ○悪意を抑制できるのが大人

劣等感が克服されると心が落ち着いてきて、次第に悪意を抑制できるようになります。人は善意も悪意も持ちますが、悪意を抑制できるのが大人です。自分は悪意を持たないと思いつている人は却って思いやりが足りないのではないのでしょうか。

大人と子供の区別は本来年齢ですべきではありませんが、何かで区別しないとイケないので今は二十歳以上を成人としています。それを「十八歳成人」に変える民法改正の検討がもうすぐ始まるそうです。憲法改正に必要な国民投票法の成立に備えてのことですが、若者の精神年齢という面からは逆行の感が否めません。

## ○いじめに強い子供を育てよう

「いじめ」と「いじめられ」は、人が成長する過程で宿命的に経験します。極端に言えば、いじめの根絶は人の成長の否定に等しいのです。ですから、私はいじめがあるのは正常だと思います。過度のいじめは防がなければなりません、いじめの根絶は考えるべきではありません。大人の世界でもいじめがあるのなら、子供はいじめに強くなるように鍛えて育てなければなりません。そして、「学校へはいじめを楽しみに行く」くらいに思っておくのがよさそうです。

## ○強さがない優しさは空虚

こう書くと、「強い子より優しい子に」という反論が返って来るかもしれません。しかし、「強い」と「優しい」とは対立する概念ではありません。「強いこと」と「乱暴」とは違います。論語に「義を見てせざるは勇なきなり」という言葉があります。武士道の神髄を表す言葉の一つでもあります。理不尽なことを見過してはならないという立派な教えも、勇気があって強くなければ実践できないというのです。いじめを傍観せず、いじめられっ子を助けたいという優しさはおそらく誰でも持つでしょうが、勇気と強さに裏付けられなければ空虚です。

幸いなことに、日本は長い間武士の社会でした。武士が学問の他に武術修業に励んだのは、勇気と精神的強さを身に付けるためです。文武両道の意味をよく理解し、伝統的な教育を復活しなければなりません。

### ○「傍観者はいじめた者と同罪」？

議論が過熱して、「傍観者はいじめた者と同罪」と言う人まで出てきました。まるで八つ当たりです。上に述べたように、いじめを抑えるのは大変勇気が要ることで、なかなかできることはありません。発言のご当人に尋ねたいですね。「あなた自身は果たしてその勇気を持っていますか」と。もっと内省的であってほしいものです。

### ○「いじめの責任は一生とらなければならない」？

新聞に緊急シンポジウムとやらの記事が載っていました。それによれば、講師の心理カウンセラーが「いじめた責任は一生とらなければならないと親が教え続けることが大切」と話したというのです。なんと感情的で脅迫じみた発言でしょうか。この講師は本当に心理カウンセラーなのでしょう。反抗期の子供の心理を本当に知っているのでしょうか。こんな講演を有り難がってご満悦の人たちやメディアの浅慮にはうんざりします。いじめは根絶するべきものという誤った原則に立つと、こういう結果になるのです。

### ○先生のお叱りを待っているワル振る生徒

ワル振る生徒は、先生からお仕置きを受けるためにわざと悪さをすることがあります。それはワル仲間に対して格好をつけるためです。ですから、先生は悪さをした生徒は必ず叱ってやらなければなりません。ただし、「叱る」と「怒る」は違いますが。きちんと叱らない先生は信用を失います。

親も同じで、叱るべきときにきちんと叱る躰をすれば、自然にいじめに強い子が育つはず。子供の大事な選択に際して「自分のことは自分で決めなさい」と言うのは無責任です。そういうときこそ親は逃げずに相談に乗ってやり、自分の経験を伝えなければなりません。

### ○衝撃的だった小学校の学級崩壊と成人式の崩壊

数年前、小学一年の学級崩壊が報じられて、日本中に衝撃が走りました。その一年生が高学年まで進級している今では、事態はさらに悪化して、学級崩壊は高学年にも及んでいるようです。なげかわしいことに、明らかに親の教育力がひどく落ちています。それは、その世代がきちんと躰けられていないからです。例えば、もう一つの衝撃的事件を思い出してください。成人式の崩壊が方々で起きたのは何年前だったのでしょうか。また、「新人類」が現れたのはいつだったのでしょうか。「校内暴力」という言葉が作られたのは1980年頃だ

そうです。教育の破綻は三十年以上前に始まっていたのです。

### ○孫をもつ世代の責任と償い

今孫をもつ世代が子育てに失敗したのです。それに気がついたら、償いに教育再生運動を支援しようではありませんか。少なくとも、孫の養育には臆せず係わるべきです。悠々自適はまだ先のことにして。

### ○ひとまず「鍛える」ことを目標に

農業社会から工業社会への構造変化やそれに伴う核家族化、小規模商店の減少と地域社会の衰弱、子供が遊べる空き地や道の消滅、ゲーム機やパソコンの普及と高度化による子供の引き籠り、情報過多など、教育環境を悪化させた要因は数多くあります。さらにフェミニズムなどの軽薄な進歩思想や、豊かさと高学歴化、メディアの気まぐれがそれに絡んでいます。ですから、教育再生論議を始めると百家争鳴で容易に収拾が付きません。それでも過去に常設の中央教育審議会や臨時教育審議会が報告書を出しましたが、結局教育は建て直せず、今日に至りました。

今は悠長に議論をしている時ではありませんから、ひとまず「鍛える」という目標を掲げて各々が前へ進んではいかがでしょうか。昔の人は言いました。「可愛い子には旅をさせよ」、「鉄は熱いうちに打て」。

### ○ご批判を乞う

上に書いたことは学説などの紹介ではありません。いじめをし、いじめられもした私自身の経験です。ご批判をお待ちします。

(平成19年1月初旬脱稿, 1月下旬改訂)